# 震災で何もかもなくしたけど、私は最高に幸せ。

足利 英紀（ひでのり）さん
【三陸ＥＭ研究会 代表／理想産業(有) 代表取締役　宮城県気仙沼市】

仲むつまじい足利さんご夫婦。英紀さん（右）の元気を支えるのは妻の和子さん（左）

## 気仙沼の美しい海が心の故郷

私の出身は岩手県で、小学5年生で室根（むろね）山に登ったんです。山頂にたどり着くと気仙沼のきれいな内湾が目に飛び込んできた。そして、その年に遠足で気仙沼湾に行きました。おんぼろバスに乗って。山育ちの人間は海に憧れて育つんですよ。船に乗ると海底の白い砂が見え、これが海かと感動した。そういう思い出があるんです。

縁あって、昭和48年に気仙沼市に来て結婚しました。その当時は海の汚染が進んで悪臭もした。家内に「海をきれいにしたい」と言うと、「あなた馬鹿じゃないの」という返事。環境保全なんて気にする時代じゃなかった。それから40歳を過ぎた頃、大病をして生き延びて、家内から「好きなことやっていいよ」と言われました。それじゃあ、気仙沼の海を子どもの頃に見たようなきれいな海にしようと、理念を作り、いろんな組織を作って取り組んで来ました。

小学５年生の頃に足利さんが書いた絵。こんな美しい里山と海のある気仙沼の町への夢と憧れが、足利さんの海をきれいにする活動の原点。この絵の原本は津波で流されてしまったが、他の人の手元に残っていたものを土台にして復元できた

1

2

1. 足利さんのお店と自宅があった場所（気仙沼市南町）。海岸のすぐそばにあり、津波で何もかも流された
2. お店と自宅の跡地は、6年経った現在も土嚢が積まれた状態。区画整理後、2020 年頃までには新たな店舗が建設できる予定
3. 足利さんは、愛耕幼稚園で 1998 年から環境学習のＥＭの先生として親しまれている。毎年園児たちの一人一人の心の中にＥＭへの興味の火をつけている。子どもたちに感動を覚えさせ、夢を抱かせる話しをしながら、自然から学べる子どもを育てている
4. 2017年3月から現在の自宅の駐車場に仮設店舗を設置。2020 年の店舗再建まで、ここを拠点に活動していく予定。自宅駐車場に設置した仮設店舗。撮影時は、まだ準備はこれからという段階でした

ＥＭエコショップ　理想産業（有）
連絡先／ Tel & Fax. 0226-24-2142
足利さん携帯 090-7935-9042

3

4

## 大津波が持ち去ることのできなかったもの

津波で自宅も店舗も何もかもなくなり、私は「何もない、もうダメだ」って、ひどく落ち込んでいました。震災後3～4日して、家内が「好きなボランティア、好きな学校教育があるでしょ」って毎日励ますんですよ。女の人は強いですよ。子どもの頃からの夢を追いかけているアホみたいな男と結婚しちゃったからね、仕方ないですよ。

そして、どうしようかと悩んでいた10日目くらいの夜、夢の中で、比嘉照夫先生が大きな銅像みたいにして、小さな私をぐわーって睨んでいるんです。それで、ぱっと目を覚ましたら夜中の3時。「何かやらなきゃダメだ！」と、そのまま計画表を書き始めました。騒然としている時代にＥＭで何をやるか。最終的なゴールまでの計画表はあっという間に出来上がりました。私は若い頃に経営学を少しばかり学び、松下幸之助の薫陶（くんとう）を受けましたから。

## ＥＭの経験と千年に一度の試練で

私は実践家です。自分で考えて、自分で試験して、失敗して、体で覚える。震災の前にいろんなＥＭ活性液を作って実践していました。基本のＥＭ活性液を1,000種類くらいは作ることができます。応用編は更にあります。味噌作りも、パン作りも、米作りも、野菜作りも全部自分でやってみました。

気仙沼からハワイの方までマグロを取りに行く遠洋漁業の船の中で船員が亡くなると、船が港に帰って来てからお葬式をするんです。そういう時の死臭対策もＥＭでやった経験があり、サメやイカや、この町特有の水産加工廃棄物の悪臭対策もやってきた。実践経験がなければ震災の時の死体や魚の腐敗、汚泥や重油の複合汚染に対応することはできませんでした。普通のＥＭではこれほどの悪臭は消せません。普段の経験・体験の蓄積があると、ひらめきも生まれて、応用が効くようになります。

微生物の世界は奥が深いですから、謙虚にやらなければなりません。謙虚に。ＥＭ活性液を仕込み終わった時には必ずお祈りをします。そうするとＥＭの力が20倍にも30倍にもなる、それが微生物の世界です。

**千年に一度の自然災害。私はこの試練に立ち向かう術を知っていた。ラッキー！** 震災で何もかもなくしたけど、私は最高に幸せです。ＥＭに出会っていたから、少しでも世の中の役に立つ体験をした。こんな幸せなことはないですね。

震災で亡くなった仲間がたくさんいます。農家をやっていた人は家も田んぼも何もない。みんなまずは自分たちの生活を立て直すのが優先だから、ＥＭのボランティア活動などは焦らないでじっくりやっていこうと思います。

### 失ったもの、得たもの

**【失ったもの】**
家、店舗、ＥＭの実験資料、活動グループの仲間（震災死）、ＥＭのボランティアの取り組み、仲間の家や田畑

**【残ったもの】**
ＥＭの実践経験、幼稚園・小学校での環境教育の成果

**【得たもの】**
千年に一度の未曾有の自然災害で、ＥＭで地域の役に立つ体験。明るく「Ａ」、楽しく「Ｔ」、前向きに「Ｍ」の生き方。略して「ＡＴＭ」が足利さんの標語

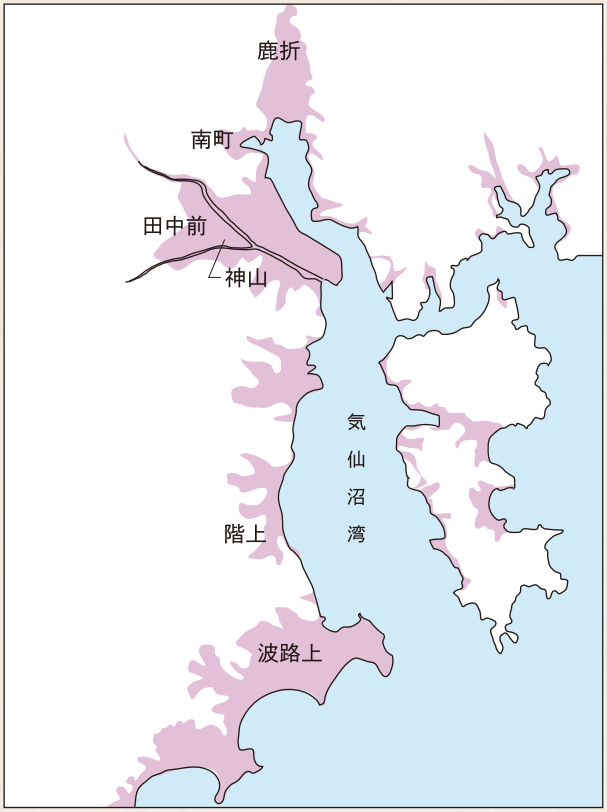
## 《当時の被災状況》

気仙沼市は、面積333㎢、人口約6万4千人。東日本大震災の被害者数は、直接死1,107名、関連死108名、行方不明者218名の合計1,433名にのぼる。住宅被災棟数は、15,815棟（平成29年2月現在。参考：宮城県公式ホームページ）。

サメの水揚げ量日本一を誇り、古くからフカヒレの産地として有名で、沿岸漁業、沖合漁業、遠洋漁業の拠点として、関連する造船から水産加工まで幅広く水産業が盛んな町。

その気仙沼湾に海底のヘドロを巻き上げた真っ黒の大津波が押し寄せた。沿岸部に立地していた重油タンク22基が流され、湾に流れ出した重油に引火、その後72時間燃え続けた。大津波によって、港に停泊中の大型漁船14隻が陸に打ち上げられた。水産加工場はほとんどが壊滅状態。陸地に打ち上げられたり、冷凍冷蔵庫に貯蔵されていた魚などの大量の水産物が全て腐敗し、強烈な悪臭源となった。大規模下水処理場や水産加工場の排水処理施設なども壊滅的な被害を受け、未処理汚水が長期間にわたり気仙沼湾に流れ込んだ。

### 宮城県気仙沼市の津波被害




参考：気仙沼市 2011.3.11（金）東北地方太平洋沖地震津波浸水図（改訂版）

気仙沼の町中が大量の魚で溢れかえった

当時の気仙沼市の様子